

〈研究ノート〉

大学生のアンケート調査からみるきょうだいの関係性 —カイン・コンプレックスとの関連に注目して—

菅野 陽子* 三木 陽子*

要約

本研究は、大学生を対象とし、きょうだい構成とその関係および欲しいと思うきょうだいについて調査して、きょうだいがいる者たちの関係の良し悪しときょうだいの出生順との関連を検討すること、またさらには大学生のきょうだいの関係性やカイン・コンプレックスの存在について示唆することを目的とした。大学生134名に対して研究協力者として質問紙調査を行った。分析の結果、きょうだいの種類との関係性では、兄、姉、弟との関係が良好とする人数が統計的に有意に多かったが、妹との関係ではそのような結果が得られなかった。また、きょうだいの人数の相違や順位によって関係性における有意な相違はみられなかった。今後は、質問紙の改良やデータ数を増やして、その精度を上げることにより、さらなる検討が求められる。

キーワード きょうだい構成と関係 欲しいと思うきょうだい カイン・コンプレックス
大学生

目次

1. 問題と目的
2. 方法
 - 2.1 研究倫理
 - 2.2 手続き
 - 2.3 調査期間
 - 2.4 調査協力者
 - 2.5 調査内容
3. 結果
 - 3.1 きょうだい構成と関係性
 - (1) 各きょうだいにおける関係性の相違について
 - (2) きょうだいペアの種類における関係性の相違について
 - 3.2 現実のきょうだいと欲しいきょうだい
4. 考察

1. 問題と目的

2021年夏、コロナ禍での開催の是非が問われながら、「東京オリンピック・パラリンピック2020」が無観客という策をもって開始されたが、そこでのメダリストたちの活躍の影にも日向にも、きょうだいの存在が語られることが多かった^[1]。同じスポーツはごく一例として、きょうだいの影響を受けて育ってきたと感じる者は少なくないであろう。またその関わり方はそれぞれに異なり、関係の良いきょうだいもいれば悪いきょうだいもいる。

少子化の一途をたどるわが国で、ひとりっ子の夫婦が増加しているとはいえ、半数を超える夫婦に2人のお子がおり^[2]、現在の若者に実際のきょうだい構成と、そのきょうだい関係をどのように感じているのかを、大学の授業を通じてひとつの結果と考察が得られると予測し、ここ数年間かけて調査をした。それにより過去4回のデータを集計し、きょうだい構成と関係を分析すること、と同時にひとりっ子も含めて仮定の欲しいと思うきょうだいの数字を比較することから、カイン・コンプレックス、すなわち同性の年下のきょうだいとの葛藤の存在を検討することが本研究の目的である。

2. 方法

2.1 研究倫理

著者の所属機関の倫理審査を経て承認されている（番号029）

2.2 手続き

調査は大学の講義時に、「きょうだいについて研究をしているが、協力を得られたら質問紙に回答して欲しいこと、また協力の有無は授業の成績にいっさい関係がないこと、途中でやめてもよいこと」を伝え、その場で回答を求めた。

2.3 調査期間

2017年～2019年の3年間6回実施したうちの4回分のデータを扱った。（調査協力者は毎回別個人である）

2.4 調査協力者

調査協力者は、筆者が講義を行ったA大学の大学生134名であった。欠損データのある27名を除いた107名（男性38名、女性66名、不明3名）を分析対象とした。

2.5 調査内容

匿名ではあるが、支障がなければ、性別、年代、結婚／未婚を記載、その後にきょうだい構成、きょうだいの関係が良好かどうかを三択（良い、普通、悪い）で○をつけ、また架空での欲しいきょうだいを○で選択をし、その理由について自由記述するよう求めた。

3. 結果

107名の調査協力者のきょうだい数と性別度数はTable 1に、きょうだいの種類と性別度数はTable 2に示している。

Table 1 きょうだい数と性別度数

N=107 (女性:66 男性:38 不明3)

きょうだい数	割合 (%)	性別	度数
1人っ子 n=20	18.6	女性 男性 不明	9 10 1
2人きょうだい n=55	51.4	女性 男性 合計	36 19 55
3人きょうだい n=24	22.4	女性 男性 不明	15 7 2
4人きょうだい n=8	9.5	女性 男性 合計	6 2 8
	100		

注. 割合 (%) は有効パーセントを示す。

Table 2 きょうだいの種類と性別度数

兄	姉	弟	妹	合計	性別
20	14	30	17	81	女性 (n=66)
14	5	14	8	41	男性 (n=38)
1	1	0	2	4	不明 (n=3)
35	20	44	27	125	合計 (N=107)
27.2	16.0	35.2	21.6	100	割合 (%)
25	19	36	20	100	重複を除いた人数

注. 1人っ子を除いた87人が持っているきょうだい数を示している。

3.1 きょうだい構成と関係性

(1) 各きょうだいにおける関係性の相違について

それぞれのきょうだいにおいて関係性の度数に相違があるかを調べるため、カイ二乗検定による適合度の検定を行った。まずは、きょうだいのいるケース全体で検討した。きょうだいごとの関係性の度数Table 3に示す。(なお、関係性が未記入であったものは分析から除外したため、きょうだい種類ごとの度数と異なっている。) 兄との関係性における度数の相違を検定したところ $\chi^2(2) = 13.00, p = .002$ であった。兄との関係性が「良い」とする度数が1%有意水準で多いといえる。姉との関係性でも $\chi^2(2) = 10.90, p = .004$ となり、関係性の「良い」度数が1%有意水準で多く、弟との関係性においても $\chi^2(2) = 18.48, p < .001$ で「良い」とする度数が0.1%の有意水準で多いという結果であった。一方、妹との関係性における度数では $\chi^2(2) = 2.67, p = .264$ であり、有意な相違はみられなかった。以上の結果、兄、姉、弟との関係は「良い」とする人が有意に多いが、妹との関係においては有意な度数の違いはみられず、他のきょうだいと比べて関係性の相違はなかった。

Table 3 きょうだいごとの関係性度数

	良い	普通	悪い	合計
兄との関係	20	8	4	32
姉との関係	13	6	1	20
弟との関係	26	11	4	41
妹との関係	11	11	5	27
合計	70	36	14	120

次に、男女別に関係性度数の相違を検討する。男女それぞれの関係性における度数を Table 4、5に示す。男性ケースでは度数が少ないため、兄、姉、妹における関係性について統計的な検定を行うことができなかった。弟との関係性については検定を行うことができ、 $\chi^2(1) = 8.33, p = .004$ であり、「良い」とする度数が1%有意水準で多いという結果であった。

女性ケースでは、異性きょうだいでみると、兄が $\chi^2(2) = 7.60, p = .022$ 、弟は $\chi^2(2) = 7.72, p = .021$ となり、どちらも5%有意水準で関係性が「良い」とする度数が多かった。女性ケースにおける同性きょうだいとの関係でみると、姉 $\chi^2(2) = 11.20, p = .004$ で関係性が「良い」とする度数が1%水準で有意に多くみられた。一方、妹では $\chi^2(2) = 3.29, p = .193$ となり、有意な相違はみられなかった。女性ケースでも、妹との関係においてその度数に相違はないという結果であった。

Table 4 男性ケースにおけるきょうだいごとの関係性度数

	良い	普通	悪い	合計
兄との関係	8	1	2	11
姉との関係	0	2	2	4
弟との関係	11	0	1	12
妹との関係	1	5	2	8
合計	20	8	7	35

Table 5 女性ケースにおけるきょうだいごとの関係性度数

	良い	普通	悪い	合計
兄との関係	12	6	2	20
姉との関係	11	3	1	15
弟との関係	15	11	3	29
妹との関係	9	5	3	17
合計	47	25	9	81

(2) きょうだいペアの種類における関係性の相違について

きょうだいペアの種類によって関係性の度数に相違があるかを検討した。きょうだいペアの分類は、SCHACHTERら(1976)^[3]における分類方法を参考に、“First pair”(回答者が1番目で2番目きょうだいとのペア、あるいは、回答者が2番目で1番目きょうだいとのペ

ア)、“Second pair”（回答者が2番目で3番目きょうだいとのペア、あるいは、回答者が3番目で2番目きょうだいとのペア）、“Jump pair”（回答者が1番目で3番目きょうだいとのペア、あるいは、回答者が3番目で1番目きょうだいとのペア）と分類した。

前述の論文では、First pairとJump pairとの比較で有意な差がみられていたことから、ここでもFirstとJump間の比較を行った。度数表をTable 6、7に示す。期待数5未満がみられたため Fisherの正確確立検定を行った。全きょうだいにおけるFirst pairとJump pair間の比較においても、3人きょうだいにおけるFirst pairとJump pair間での比較でも、関係性における有意な度数の相違はないという結果であった（全きょうだい； $p=.302$ 、3人きょうだい； $p=.716$ Fisher正確確立検定による）。

その他、2人きょうだいにおける回答者が1番目ペアと回答者が2番目のペア間、3人きょうだいにおけるFirst pairとSecond pair間、Second pairとJump pair間での検定を行ったが、いずれも有意な相違はみられなかった。

Table 6 全きょうだいにおけるFirst pairとJump pairの関係性度数

	良い	普通	悪い	合計
First pair	43	19	12	74
Jump pair	14	8	1	23
合計	57	27	13	97

Table 7 3人きょうだいにおけるFirst pairとJump pairの関係性度数

	良い	普通	悪い	合計
First pair	8	7	1	16
Jump pair	10	4	1	15
合計	18	11	2	31

3.2 現実のきょうだいと欲しいきょうだい

質問紙の2番目の設問で「架空で欲しいきょうだい」とその理由を求めたが、きょうだいの種類と度数はTable 8の通りである。実際の各度数（Table 2）と単純比較すると、兄はほぼ同数であったが、姉は2倍強の42あり、弟は逆にほぼ3分の1の16となり、妹はやや減じて23である。しかしながら、前者はひとりっ子も含む有効協力者107名の回答数であり、後者は87名（ひとりっ子20を除いたもの）の「実際のきょうだい数」と、それぞれ異なる母集団であることに注意が必要である。きょうだい数における「欲しいきょうだい」を比較するために、ひとりっ子と2人以上の度数をTable 9に示している。

Table 8 全きょうだいにおける「欲しいきょうだい」

全体：合計数=118>107

	N	兄	姉	弟	妹	合計
女性	66	27	20	7	11	60
男性	38	9	22	8	10	48
不明	3	1	0	1	2	4
合計	107	37	42	16	23	118
	割合 (%)	31.3	35.6	13.6	19.5	100

注. 以下は性別の「欲しいきょうだい」の割合を示す。

	割合 (%)	兄	姉	弟	妹
女性 (66)	100	40.1	30.3	10.6	16.7
男性 (38)	100	23.7	57.9	21.0	26.3
不明 (3)	100	33.3	0	33.3	66.4

Table 9 きょうだい数と「欲しいきょうだい」(1人っ子と2人以上)

N=118 兄：37 姉：42 弟：16 妹：23

きょうだい数		兄	姉	弟	妹	なし
1人っ子 (n=20)	度数	10	7	3	3	8
	割合 (%)	50.0	35.0	15.0	15.0	40.0
2人以上 (n=87)	度数	27	35	13	20	17
	割合 (%)	31.0	40.2	14.9	22.9	19.5
合計		37	42	16	23	25

注. なし (25) の内訳：未記入、不要 (いらない)

各度数の少なさから今回は特に統計処理を試みてはいないが、選択したきょうだいを7の
 カテゴリー、すなわち①異性(年齢の上下なし) ②同性(年齢の上下なし) ③年上(兄/姉)
 ④異性と同性(どちらか、どちらでも) ⑤現実にはいないきょうだい(全て)重複あり
 ⑥年下(弟/妹) ⑦不要(いらない、今で満足)に分類したものがTable 10である。

Table 10 「欲しいきょうだい」の分類と度数

N=107

カテゴリー	度数	割合 (%)	女性	男性	不明
①異性(年齢上下なし)	38	35.5	20	18	0
②同性(年齢上下なし)	18	16.8	12	6	0
③年上(兄・姉)	9	8.4	5	3	1
④異性と同性	8	7.4	4	4	0
⑤いないきょうだい	6	5.6	4	2	0
⑥年下(弟/妹)	5	4.6	3	1	1
⑦不要、いらない	5	4.6	3	2	0

もっとも著しいのは、①異性のきょうだいを選択した度数が38と全体の34.5%と約3分の1と大きく、次に②同性は、そのほぼ半数の18であった。以下③と④は9、8で、⑤～⑦はそれぞれ5、6と少数ながら「その理由」が明白であり、カテゴリー化が可能であった。

これらのことから、欲しいきょうだいの最多度数は姉であり、最少度数は弟であったことで、現実には弟が最多度数であり、姉が最少度数であったことを照らし合わせると、「異性かつ年上のきょうだい」が求められていることを示唆するものである。理由として「年上が好きだから」「守ってくれそう」「可愛がってくれる」「一緒に買い物に行きたい」などがあげられていた。さらに詳細については、以下の考察で述べることにする。

4. 考察

本研究の第一の目的は大学生のきょうだいの構成とその関係性を調査することであったが、きょうだい構成の結果をまず全国平均と比較するために、厚生労働省の出生基本調査を参照した。「調査別にみた、夫婦の出生子ども数分布の推移（結婚持続期間15～19年）」によれば、第11回調査（1997年）の結果^[4]は1人（9.8%）、2人（53.6%）、3人（27.9%）、4人（5.0%）であり、本研究の調査対象の学生の出生期間がその前後に当てはまるといえる（すべて10代後半から20代前半であった）ので、3.1の結果を比較してみたところ、1人っ子の割合（18.6%）と4人きょうだい（9.5%）は高く、3人きょうだいはやや低め（22.4%）であり、2人きょうだい（51.4%）は平均値に近似していた。その結果を踏まえると、A大学の研究対象の学生集団では、ひとりっ子と4人きょうだいが、全国平均からみて多かったといえよう。このことから、2人きょうだいの関係性について精査することは、少子化といえどもわが国における今後のきょうだい関係をみていくのにも、意味が大きいと思われる。

今回の結果で興味深い点の1つは、概して兄、姉、弟との関係が良いとのことと言えたのだが、妹との関係ではそうとは言えなかったことである。なお、「関係が悪いきょうだい」の度数は14であり、その対象はそれぞれ妹5、兄4、弟4および姉1と僅差であるので、「関係が悪いきょうだい」が特に妹であることはなかった。しかしながら、他のきょうだいと比べると、妹と良い関係であるとする人は少ない可能性があるのであろう。また、出生順位によるそれぞれの関係性の統計的な相違はみられなかったが、カイン・コンプレックスに関わる貴重な先行研究^[5]に従った手続きで統計処理を試みたことは意義があったといえよう。本研究では、きょうだいの出生順位で、「すぐ下の同性のきょうだいと関係がよくない」という結果は得られず、一概にきょうだい間の関係性は良好である傾向が見られたが、架空で欲しいきょうだいへの回答結果では、その関係の良し悪しに関係なく「異性の年上のきょうだいを望むこと」が顕著であったので、深層心理的に本来のカイン・コンプレックスの意味するところ、すなわち「カイン（兄）のアベル（弟）に対する葛藤」が心底に潜んでいると示唆しているというのは誇張のし過ぎであろうか。

最後に、本研究の検討点や限界を述べる。第一に、大学生という限定された若者が対象であったことである。このことは、筆者のねらいとして大学生にしぼった理由がある。エリク

ソン^[6]のいうところの青年期にあたり、「子どものきょうだい関係」と「大人のきょうだい関係」の狭間であって、子ども時代の親をめぐる嫉妬心やライバル心が露わではなくなり、また発達過程におき親やきょうだいから心的距離ができるであろう。その意味で自身のきょうだい関係をかなり客観視できていると想定した。しかしながら、就職や結婚など人生経験を重ねると、「大人のきょうだい関係」は疎遠になったり逆に密接になったりと様々な要素がからみ、関係性は複雑化を呈するであろう。そこで大学生に調査協力を得ることにした。ただ規模の大きくないA大学の授業時間内の調査であり、複数回の調査でもサンプル数が期待より小さかったので、今後はさらに母集団を大きくする必要がある。一方、多様な世代で調査するとまた世代間差や個人差など興味深い結果が得られることは予測される。

第二に、質問紙の再検討である。本研究の調査に用いた質問紙は、非常に単純で簡便なもので、調査協力者には短時間で回答ができて、負担が少ない。匿名であり性別の記載は強制ではなかったが、ジェンダー問題の観点から今日的に質問することを躊躇したが、きょうだい関係におき同性か異性かは必須変数であったため質問項目に含めた。きょうだい関係の良し悪しを三択（良い・普通・悪い）にしたのも、たとえば五段階評価にすると迷いやすく、「普通」にシフトしてしまう恐れがある。それでこの調査では選択数を極端に少なくしてみた。結果として、半数以上が「良い」となったのである。

よい心理テストは妥当性が高く、信頼性が高いこと、さらには効率性がある。本質問紙は質問項目が少ないので、少なくとも10項目ないと信頼性は低いのであるが、二番目の「架空で欲しいきょうだい」という質問項目に関しては、深層心理的に分析する含み価値があり、協力者にとっても効率性の高い心理テストといえよう。筆者らは、本研究と平行してきょうだい研究の質的研究も進めている。協力大学生の個人面接と質問紙を行っているが、こちらは質問項目が複数あり、面接によって家族やきょうだい関係を直接本人から聴き、自由記述の投影的手法の質問紙に回答を得ている。これらの研究を補完しあって、質問紙の改善や調査方法の工夫を重ね、量的および質的なきょうだい研究における今後の課題としていく。また、関係の悪いきょうだいに対する心理臨床活動に示唆できるものでありたいと考える。

引用文献・注

- [1] 読売新聞 2021年8月5日(木)朝刊1面
レスリング女子57キロ級の川合梨紗子選手(26)が、前日に62キロ級を制した妹の友香子選手(23)に続き、夢をかなえたが、「『一緒に一位』幼い日から」と、また、ボクシング男子フライ級の田中亮明選手(27)は、「田中 弟とつかんだ『銅』」との新聞の見出しがあった。体操男子の橋本大輝選手(19)は、2人の兄とともに日々練習に励んだそうだが、他のスポーツでもきょうだいでライバルとして切磋琢磨してきた選手の記事やメデイで取り上げられることは枚挙にいとまがないであろう。
- [2] 国立社会保障・人口問題研究所, 出生動向基本調査(結婚と出産に関する全国調査), ipss.go.jp/site-ad/index_japanese/shussho-index.html, (2021年9月20日)
- [3] Schachter, F. F., Shore, E., Feldan-Rotman, et al. (1976), Sibling Deidentification. *Developmental Psychology*, 12 (5), 418-427
- [4] 既出 [2] p39, p40
- [5] 既出 [3] について、Abramovitch, H. はその著書のなかで、カイン・コンプレックスが(学術論文で)初めて用いられたと主張している。
“Brothers and Sisters MYTH AND REALITY”, Texas A&M University Press First edition 2014, p136
- [6] エリク・H・エリクソン, 『アイデンティティとライフサイクル』, 西平直・中島由恵訳, 誠信書房, 2016年, p82

参考文献

- 平山亮 古川雅子 『きょうだいリスク』朝日新書, 2016年
村上宣寛 『心理尺度のつくり方』北大路書房, 2013年

謝辞

本研究の調査に協力して下さったA大学の学生の皆様に心からの感謝を申し上げます。

Summary

On sibling relationship in a questionnaire for university students
—investigating its relevance to the Cain Complex—

Yoko Sugano, Yoko Miki

This study, intended for university students, seeks to examine the relevance of birth order for and gender among siblings is preferred, and also suggests implications for sibling relationships among university students and the existence as research subjects. A questionnaire was carried out on 134 university students as research subjects. Regarding the relevance of birth order and gender, analysis showed a high level of positive ratings for the relationship with an elder brother, elder sister and younger brother, statistically significant difference in sibling relationship with a younger sister. There was no statistically significant difference in sibling relationship according to the number of siblings and birth order. Further studies will be required so as to enhance accuracy by improving the questionnaire and obtaining more data.

Keywords Structure and relationship of siblings, desirable siblings,
Cain Complex, university students

(2021年11月11日受領)